

一日の勤務を終え、瑛子が帰宅すると、美和子の姿がまたあった。美和子は今夜も泊めてほしいと言った。美和子は母にありのままを話したという。母にこれからのことはまかせたが、義父の顔はもう見たくないと強い口調で瑛子に訴えた。頼られるのは先生だけだと、深刻な表情で瑛子を見つめている。瑛子は美和子を自室に迎え入れた。

部屋で二人きりになると瑛子は昨日のことが思い起こされ緊張した。また教師と教え子の関係ではなくなるおそれをいだいていた。美和子に誘われたら、きっぱりとはねつけることなどできないと感じていた。美和子とベッドの中で戯れたあの感覚が瑛子の身体には残っている。そして残っていた感覚は鮮明になってくる。少女に見つめられると体の芯が熱くなる。求めているの？私は教え子との禁断のレズの関係を求めているの？そんなことないときっぱりと言い切るだけの自信はない。細くしなやかな指が全身を撫で、熱くぬめった舌が瑛子の官能の炎をさらに燃え上がらせたのだ。教え子である年下の少女に、軀を思いのままに

愛撫されたのだ。何度もアクメを迎え、その姿をこの少女の前に晒したのだ。

「ねえ、先生、学校では私をわざと無視していたでしょう？」

校舎内で瑠子の臀部をスカート越しに美和子が撫でてきた。瑠子はその手を他の生徒に見られないように振り払って足早に立ち去った。そのことを美和子はとがめるのだ。あんなに愛し合った仲なのに、私の行為を無視するなんてひどいと美和子は瑠子に迫った。しかしその目は笑っている。冗談交じりで瑠子を責める。

「先生には私を無視した罰が必要だわ」

「罰？だって学校ではだめよ。もし誰かに見られたら大変でしょ？」

瑠子が美和子をなだめる。

「じゃあ、見られる心配がなかったら先生の身体を愛してもいいのね？」

「そ、それは・・・やっぱりだめよ・・・私たち教師と生徒なの

よ」

「先生は私のことが好きだって昨日何度も言ってくれたじゃないですか。私にしがみついてキスを求めてきたのは先生ですよ。あれはうそだったの？」

「だって……」

「義理の父親にレイプされ犯された哀れな娘だと思って、私のこと、弄んだだけなの？」

「そ、そんなことはないわ」

「だったら私の愛を受け止めた欲しい。学校の外だったらいいんでしょ？」

美和子が瑠子の手首を握ってくる。

「やっぱり、女性同士で愛し合うなんてやっぱりおかしいことなのよ」

瑠子の受け答えには余裕がなくなっている。

「昨夜はあんなによろこんでくれたのに……私たちはもう先生と生徒の関係を超えて愛し合ったことは事実でしょ？それとも昨日の先生は全部嘘だって言うの？そんなの哀し

すぎるわ・・・そうだとしたらわたし、耐え切れない・・・先生に遊ばれたただけだったの……………」

美和子は瑠子を追いつめていく。瞳の奥には妖しい光が宿っているのだがそれに女教師は気づかない。気づくだけの余裕がないのだ。

「昨夜、先生は何度いっちゃったか覚えています？もういきっぱなしになっちゃったから回数なんか数えられないわよね。」

美和子が意地悪く笑う。

「そんなこと言わないで……」

「先生ってすごく感じやすい体質なんだよね。それに……濡れやすい身体だよね」

「美和子さん、お願い……そんな恥ずかしいこと、言わないで……………」

「恥ずかしいですか。でも全部、本当のことじゃないですか。先生は教え子とレズをして十分に感じるエッチな身体をもった女教師だよ」

美和子が瑛子を抱きしめた。スカート越しに臀部をさする。
美和子の唇が瑛子の唇に重ねられる。スカートの中に美和子の指が入り込み、ショーツの上から双臀をさすり、股間を愛撫する。

「ねえ、先生、罰を受けますか？それとも拒否しますか？」

美和子が耳元で甘くささやく。

「罰って？」

「そうね、お尻叩きはどうですか？」

「お尻を叩かれるの？」

「そうです。先生は学校でお尻を触らせてくれなかった罰として、これから、お尻を叩かれるんです。どうですか？
自分からお尻を叩いてくださいって言えますか？」

「…どうしてもお尻を叩きたいの？」

「叩きたいわ。その魅力的なお尻を真っ赤にしたいんです。

叩かせてくれますよね」

美和子は瑛子の目を覗き込んで、

「叩いてもいいですよね」

と、もう一度念押しする。

「…軽くね。やさしく叩いてね…」

瑠子はスパンキングを承諾すると、首筋まで赤くする。

「先生、もっと大きな声で言ってください、よく聞こえなかったわ」

美和子は瑠子の臀部をなでた。

「意地悪な美和子さんね…お尻を叩いてください」

今度は、はっきりと言った。美和子は、抱きしめていた女教師の身体から離れると、後ろに回った。

「ねえ、お腹がすいたわ。食事をしてから、先生に罰をあたえてよ。」

瑠子は身軽な動きで身体を翻すと、美和子の手を逃れ、キッチンに向かった。美和子も立ち上がってキッチンに入る。

瑠子は、エプロンを美和子に渡した。

「手伝ってね」

一緒に夕食の準備をしようと誘った。キッチンで夕食を作りながら、ときおり臀部をなでられた。

「今はだめ。怪我しちゃうわ」

包丁を使う瑛子は臀部をなでられ、腰をよじる。

「キスしようよ」

美和子が後ろから身体を寄せると、瑛子はキスを受けた。

美和子の舌が差し込まれる。

「もう、美和子さんはせっかちなんだから……」

教え子の舌を口腔に差し込まれながら、瑛子は瞳を潤ませていくのだった。美和子を愛おしいと思った。美和子がお尻を叩きたいと思うならば、身をまかせようと思った。女性が同性の臀を叩きたいなどという思いをもつのは異常だ。しかし瑛子には美和子のゆがんだ心の悲鳴が聞こえるような気がする。義父に身体を何度も求められた美和子の心は、バランスをくずしているのだ。美和子が望むならば、 spanking をされようと思う。それで気が済むのならば、美和子の心を癒すことになるのだと思うのだ。

食事を済ませ、お風呂を使うと、二人だけの秘密の戯れが始まる。瑛子がベッドに上がって四つん這いになった。

パジャマの上着だけを着て、下はショーツのみだ。美和子のリクエストに従ったのだ。美和子は後ろに回って、ショーツ越しに尻たぶを撫でる。

「美和子さん、どうぞ、先生のお尻を叩いてよ」

珪子はショーツの張りついた豊麗な臀部を美和子に突き出した。